

9 6 歳の現代美術家・齋藤秀三郎

# 文明キャベツ

(デジタルアーカイブ)

ごあいさつ

齋藤秀三郎は、宮崎県西都市の出身です。齋藤は大学時代に水産資源学を学び、<自然は無尽蔵ではない>ことを痛感しました。初期には「九州派」や「グループ西日本」に所属し、前衛的な作品を発表しました。本展では代表作であるメゾチント（銅版画）の作品を始め、アクリル画、インスタレーションや灯籠など、齋藤の主要な作品群を展示しています。

当館では、地域に密着した企画展を、これまでも数多く実施してきました。地域の財産を掘り起こし、スポットを当てることは、地域の美術館としての重要な役割のひとつだと認識しています。今もなお現役で活躍する齋藤の作品を、西都・児湯地区の公立美術館たる当館で一堂に展示できることは、大きな喜びであります。

本展のタイトルにもあるとおり、齋藤の多くの作品にはモチーフとしてキャベツが用いられています。身近にあるものが、作品の姿をとって様々な表情を見せてくれることは、美術の醍醐味と言えるでしょう。

「鑑賞者になにを残せるか」と作品を通して問いかける、齋藤の作家としての姿勢を感じながらご鑑賞いただければ幸いです。

おわりに、本企画展に作品の提供をはじめ快く御協力をいただきました齋藤秀三郎様をはじめ、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

平成30年10月27日

高鍋町美術館

## 文明キャベツ

文明の発展は豊かさの反面、原子爆弾投下や原発事故のような大変な被害や災害をもたらしました。しかも、それらの害は子や孫までに及ぶというのですから、悲惨そのものという外はありません。文明の発展は、どこかで大きく間違っていたのでは…と思いたくもなります。

この不安を表現するのに私は、<メゾチント技法による銅版画>を用いました。モチーフはキャベツです。何故キャベツなのかとよく聞かれますが、それは<註>をお読み頂きたいと思います。

話は変わりますが、小学校のクラスメートから電話があって、彼等のほとんどが亡くなったことを知らせてくれました。私達の世代もいよいよ終わるのかと思うと、言い知れぬ寂しさに包まれました。そこで次の個展は、幾多の困難を乗り越えてきた彼等の魂の供養をすることに決め、灯籠を用いることにしました。何故かについては、これも<註>をご覧ください。

灯籠に描かれたクラスメートや私の家族の肖像を見渡したとき、私達の世代は一体どんな時代だったのかを問うてみたくなりました。

哲学者・内山節は、現代を文明の暴走を許した恐ろしい時代とし、文明はどこで間違いをおこしたのかを大きな視点から見直し、今や文明の転換期にあると訴えています。そして新しい文明への動きはもう始まっていると、一条の希望も述べています。更に復興に当たっては、先ず死者達への伝統的供養から始めるべきことを強調しています。

今回は、現代文明の不安を表現した作品と、魂の供養を表現した作品の双方を同時に展示することにしました。両作品の間を往復しながら何かを感じて頂ければ幸いです。

キャベツは作品の中でいろんな役回りをしてくれました。現代文明を生み出す脳であったり、文明に曝された内臓であったり、または、抽象的「命」であったりしました。高鍋町はキャベツの産地と聞きました。そうとは知らない私が、モチーフにキャベツを選んだことに不思議なご縁を感じます。

今回は、高鍋町美術館で私の企画展を開催して頂きましたことに、深く感謝しています。そして、展覧会を通して故郷の方々との交流が出来ますことを、楽しみにしています。

齋藤秀三郎

註 1 何故キャベツを選んだのか

大きな葉が命を包むように一枚一枚重なり合って、大きな玉をつくっているのにユーモアを感じたことが一つです。二つ目は、あの大小の葉脈です。葉脈を血管と見做すと、あたかも現代文明に曝された剥き出しの命のように見えたことです。

註 2 何故灯籠を選んだのか

三股村の御崎神社では、毎年「六月灯」という村祭りがありました。祭りの日の夕刻になると、夜空には花火が打ち上がり、神社のなだらかな階段の両側には夜店が並びます。そして子供達は、手作りの灯籠を持って集まり、神前に奉納するのが習わしなのです。それにヒントを得ました。

## 謝辞

本展覧会を開催するにあたり、貴重な作品や資料を貸与くださいました下記の美術館、関係機関並びに所蔵家各位、作品調査・文献調査等に際しご協力、ご助言いただきました皆さまに深く感謝の意を表します。また、お名前は差し控えさせていただきましたが、本展覧会の実現のためにご尽力賜りました方々に、この場を借りて心からお礼申し上げます。

## アールスペース貌

飯田 章人

桑野 進

椎原 一久

仙頭 利通

齋藤 秀三郎

宮城 壮一郎

(50音順、敬称略)

## 凡例

- ・本書は、「96歳の現代美術家・齋藤秀三郎 文明キャベツ」(平成30年10月27日～11月25日 高鍋町美術館)の開催に際し出品された作品・資料のうちから、齋藤秀三郎の主な作品・資料について収録している。
- ・作品データは、作品番号、作品名、制作年、技法・素材、サイズ(縦×横×奥行cm)、所蔵者の順に表記した。
- ・作品名は本展覧会にあたって齋藤秀三郎氏本人が指定したものである。そのため、それぞれの作品が制作された年に発表された作品名と一部異なる作品がある。
- ・2005年に制作された銅版画は1990年代に制作された銅板を基に、銅板の配置や使用するインク、刷り具合の濃度を調整したうえで2005年に齋藤秀三郎氏が刷った銅版画である。
- ・齋藤氏本人による文章は、本人の文字をそのまま使用している。そのため、旧称や旧字体が使用されている。
- ・年譜は「齋藤秀三郎版画集」(2017年7月30日)をベースとして一部情報を加筆している。

## 目次

|     |                 |
|-----|-----------------|
| 1   | 高鍋町美術館あいさつ      |
| 2   | 「文明キャベツ」 齋藤秀三郎  |
| 4   | 謝辞              |
|     | 凡例              |
| 5   | 目次              |
| 6   | 図版              |
| 2 7 | 「齋藤秀三郎の画業」 青井美保 |
| 3 1 | 年譜              |
| 3 8 | 写真提供            |

図版

1

---

キャベツ0508

2005年

銅版画

47.0×47.0cm



2

---

キャベツ9102 (インポテンス)

1991年

銅版画

54.4×70.3cm



3

---

キャベツ9002 (ハート)

1990年

銅版画

65.2 × 75.4 cm



4

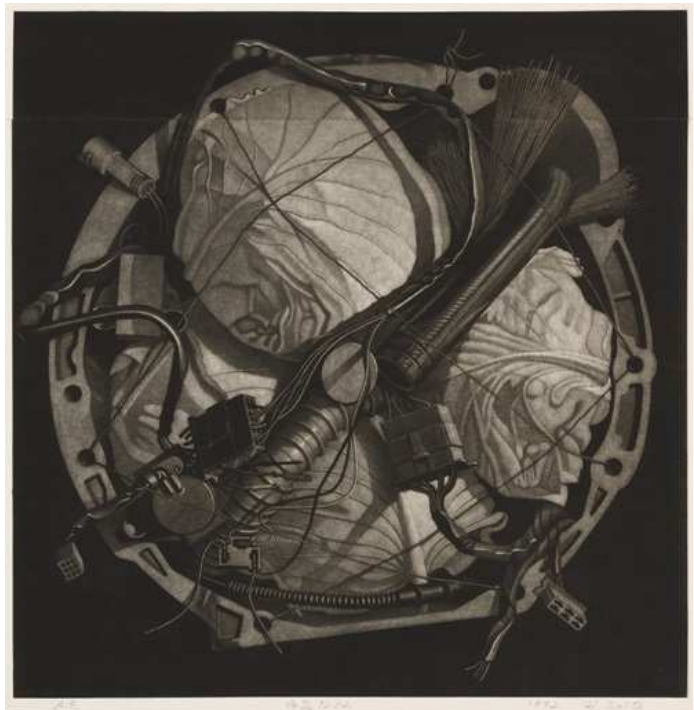
---

キャベツ9202

1992年

銅版画

80.4 × 78.6 cm





5

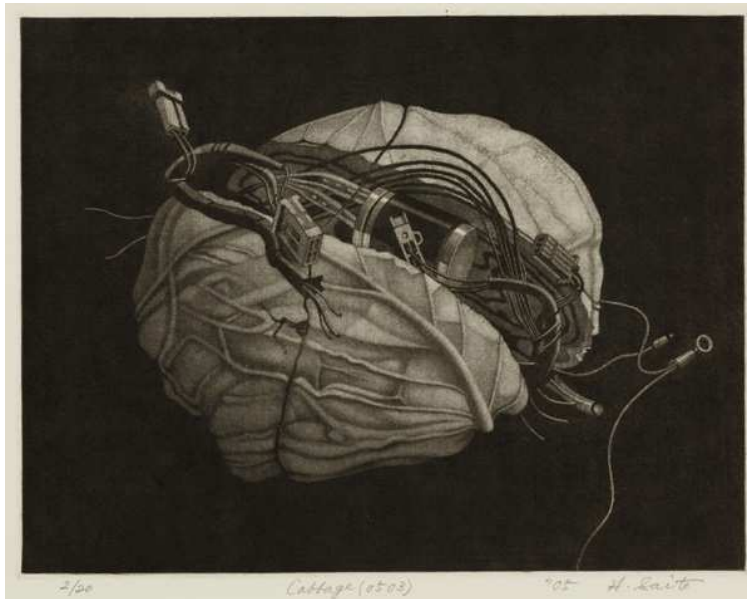
---

キャベツ0503

2005年

銅版画

42.8×55.0cm



6

---

キャベツ8703 (処女)

1987年

銅版画

50.5×60.4cm



7

---

キャベツ0505

2005年

銅版画

47.4 × 53.3 cm



8

---

キャベツ0502

2005年

銅版画

45.5 × 55.5 cm



---

キャベツ1702

2017年

アクリル画

78.2×75.3cm



---

キャベツ1703

2017年

アクリル画

78.2×85.3cm



1 1

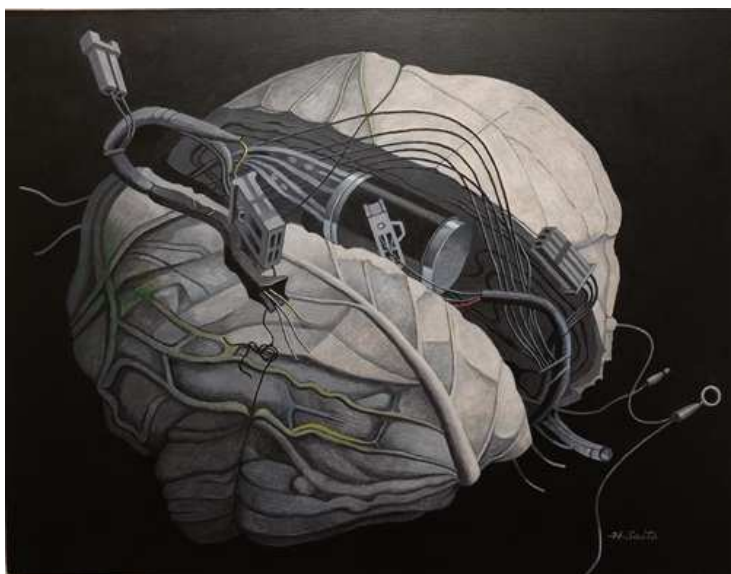
---

キャベツ1701

2017年

アクリル画

78.2×101.2cm



1 2

---

キャベツ1706

2017年

アクリル画

78.2×121.5cm



13

---

キャベツ1705

2017年

アクリル画

78.2×106.0cm



14

---

キャベツ0501

2005年

銅版画

37.8×39.8cm





15

---

キャベツ8802（すばらしい能力）

1988年

銅版画

65.3×75.4cm



16

---

キャベツ9013（攻撃性）

1990年

銅版画

65.3×75.4cm



17

---

キャベツ9201 (つるされたもの)

1992年

銅版画

100.8 × 79.7 cm



18

---

キャベツ9101 (インポテンス)

1991年

銅版画

65.3 × 75.3 cm



19

---

キャベツ8902 (スピリット)

1989年

銅版画

65.3 × 75.4 cm



20

---

キャベツ0509

2005年

銅版画

35.9 × 40.8 cm





21

---

キャベツ0504

2005年

銅版画

48.9 × 38.8 cm



22

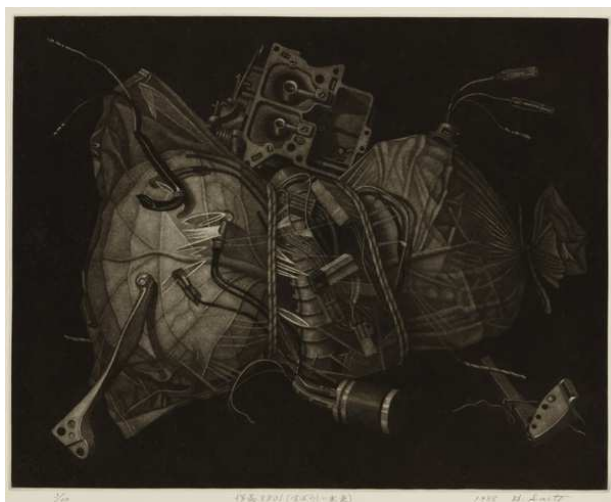
---

キャベツ8801 (すばらしい未来)

1988年

銅版画

65.3 × 80.4 cm



23

---

キャベツ9003 (風景)

1990年

銅版画

65.3×80.8cm



24

---

キャベツ9001 (風景)

1990年

銅版画

73.9×85.4cm



25

---

曝されたもの

2008年

石膏・木材・アクリル絵具

h 91.0 × w 76.9 × d 110.8 cm × 5点



26

---

キャベツの行進—どこへ

2008年

石膏・木材・アクリル絵具

h 103.0 × w 42.0  
× d 42.0 cm × 30点

h 42.0 × 42.0 ×  
42.0 cm × 4点

h 180.0 × w 120.0  
× d 120.5 cm × 5点



27

---

500 km/h

2008年

アクリル画

92.1 × 183.4 cm × 3点



28

---

Mach

2008年

アクリル画

92.1×183.4cm×3点



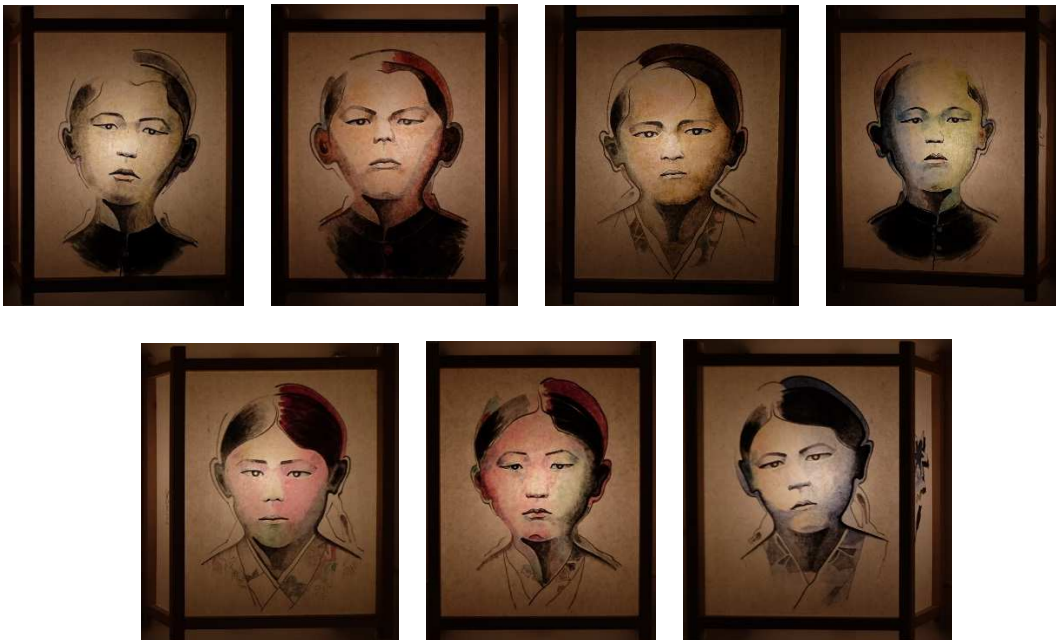
魂（クラスメート）

2012年

木材・紙・アクリル絵具

h60.5×w45.3×d20.6cm×14点

h101.9×w203.9×d31.0×1点







30

---

魂（花と虫）

2012年

木材・紙・アクリル絵具

h41.8×w29.7×d19.9cm×3点



31

---

魂（家族）

2012年

木材・紙・アクリル絵具

h60.6×w44.7×d19.8cm×6点

h101.9×w203.9×d31.0cm×1点







## 資料 1

### メゾチントの道具

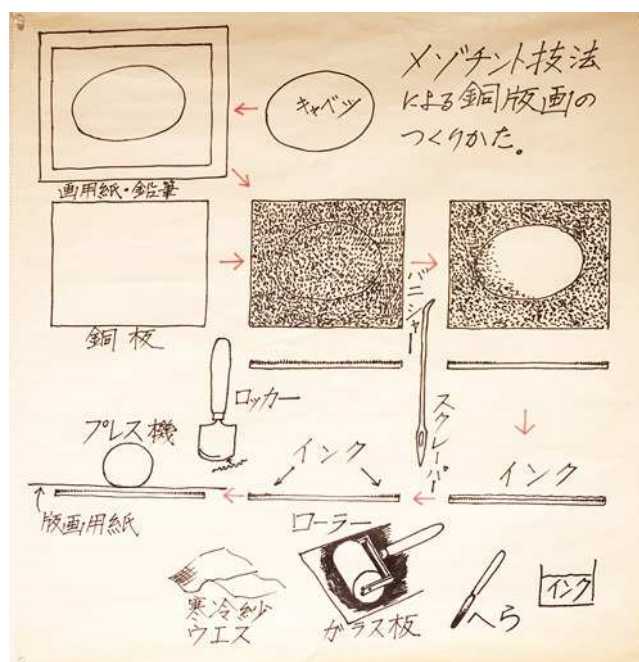
(ロッカー・バニッシャー兼スクレーパー・銅板など)



## 資料 2

### メゾチント技法による銅版画のつくりかた

紙・マジックペン



### 資料 3

---

#### 映像

美の鼓動・九州「現代美術家 齋藤秀三郎」

2015年放送

テレビ西日本制作

はじめに

齋藤秀三郎（1922～）は社会批判を基軸として歩んだ美術家である。画業の前半は、人物画・抽象画を主とし、二科展（東京）に入選、市民芸術祭（福岡）市長賞の受賞を果たすなど、その実力はすでに評価されつつあった。しかし自身のスタイルを築き始めたのは、画業の後半、銅版画（メゾチント）でキャベツを描きはじめてからだった。制作の基調となっていたのは、人間社会と文明の関係性であり、60歳を過ぎてから90歳代後半となる現在まで、表現は変化し続けている。抽象表現が主流であった九州派のなかで、のちの齋藤の銅版画は異色の存在である。ジャーナリストの小林清人はこう述べている。

『真正の作品にあつては、文字通りの対象の模倣であれ、概念のうちにある対象の模倣であれ、そこでミメシスの算出的な活動が行われているという一点において、具象と抽象の区別は意味をなさなくなる。模倣は構成であり、構成もまた模倣なのだ。そのような洞察を手中にしたとき、おそらく齋藤さんは安んじて具象に回帰し得たのである。』<sup>1</sup>

齋藤は、メゾチント作品のなかでキャベツと機器といった非現実的な組み合わせを具象で描写する画家として認知された。齋藤が生涯を通して主題としている「現代社会への警鐘」の表現において、様々な試みを行なった末に、齋藤は再び具象の意義を見出した。

齋藤作品については、近年では2015年に福岡市美術館で開催された「九州派展」にて九州派という文脈のなかで紹介され<sup>2</sup>、福岡市美術館の山口洋三氏、ジャーナリストの小林清人氏、アートディレクターの安部文範氏らによって、これまでに様々な形で研究が進められてきた。だが、それらには齋藤の生まれた故郷・宮崎のことは触れられておらず、齋藤の全体的な「芸術家像」は、未だ明らかにされていないように看取される。

---

<sup>1</sup> 「いっそうたたえられよ、見通しつつも踏み留まる者」

齋藤秀三郎銅版画集 2017年7月30日刊行

刊行者 齋藤秀三郎 発行所 行光出版 印刷 博巧印刷 製本 洪田製本

<sup>2</sup> 「九州派展」福岡市美術館

2015年10月28日（水）～2016年1月17日（日）

「福岡市美術館業叢書 6 九州派資料集」

編集 福岡市美術館 発行（公財）福岡市文化芸術振興財団

制作・販売グラムブックス

本稿は、齋藤の生涯にわたる表現の変遷を整理しながら、齋藤の「キャベツシリーズ」における社会批判的性格を明らかにすること、また、齋藤作品の評価の在り方について考察することを目的としている。

## 1. 宮崎から九州大学へ

齋藤は宮崎県西都市に生まれ、1935年に三股村長田尋常小学校を卒業した。当時の小学校時代のクラスメートとは近年まで交流があったようで、それによって齋藤の周りで増えていく死者=魂を、意識せざるを得ない状況となったことが推測される。<sup>3</sup> 齋藤は、1942年に県立第一鹿児島中学校を卒業している。営林署に勤めていた齋藤の父は、この時期民間の会社に単身赴任している。中学校では図画の時間が楽しみで、当時から「見たものを具象で描くこと」には自信があったと齋藤は語っている。<sup>4</sup> また、齋藤の中学校時代には高鍋町出身で歌人の安田尚義<sup>5</sup>が教鞭をとっていた。齋藤は直接安田の授業を受けることは無かったが、住まいが近所にあり、何度も自宅へ招かれるほどの交流があった。齋藤の妹・篤子の女学校入学の折、単身赴任の父に代わって安田が保証人となったというエピソードもある。

その後齋藤は、南満州工業専門学校鉱山工学科、三重海軍航空隊入隊、第七高等学校を経て、1952年に九州大学農学部水産学科を卒業した。濫獲により資源は容易に無くなることを知った齋藤にとって「社会の在り方を問う」という画家としての思想の原型は、このときに形成された。

## 2. 二科会・九州派時代

大学卒業後、水産関係の就職を辞退して福岡市内の中学校に就職した齋藤は、同じ中学校の美術教師と出会い美術に目覚めた。当時、齋藤は30歳。画家としてのスタートは遅いものだった。翌年、二科会会員の伊藤研介に師事する。同年より、福岡県美術展への出品を開始し、1955年（33歳）に第40回二科展に初入選をしている。この時期、齋藤は労働者や子どもなどを多く描いているが、その背景には労働条件の改善を希求する想いや、不当な搾取・抑圧などへの反抗心がうかがえる。

齋藤は第42回二科展に落選したことをきっかけに、九州派へ参加。元々、組合運動に熱心であった齋藤にとって九州派での活動は、作品のメッセージ性を強く認識する転機となった。目に見える形での表現は一転したが、二科展時代も九州派時代も、一貫していたことがあった。美術をもって社会に訴えることである。九州派は「反芸術」を含む組織論の色濃

---

<sup>3</sup> 「魂（クラスメート）」2012年発表作品

<sup>4</sup> 2017年7月23日 取材内容より（齋藤氏自宅にて・聞き手：青井）

<sup>5</sup> 「高鍋町史」1987年6月1日発行

いグループであったため、その多くが抽象画を描いている。齋藤も石炭を混ぜた油絵具で描いた抽象画などを制作した。しかし、齋藤の手元には九州派時代の作品は1枚も残っていない。齋藤は「全部捨てた。保管する金も場所も無かった」と語るが、現在の心情から察するに、この時代の作品は、まだ齋藤の納得できるものではなかったことも理由のひとつではないだろうか。

その後、齋藤は九州派が休息状態に入ったことをきっかけに、グループ西日本に参加。抽象画で思うように表現できていない自身の模索を目的として、サム・フランシスやジャン・デビュッフェ等を研究した。1967年（45歳）には、第1回福岡市民芸術祭にて市長賞を受賞するなど、順風満帆のように見えたが、自身は依然葛藤し続けていた。他者の模倣でなく、自分にしか描けない表現を模索し、自信を持てずにいた。

### 3. 銅版画時代

1983年（61歳）、齋藤は福岡市立福岡商業高校の理科の教諭を定年退職した。厳密に言えば、福岡市立福岡商業高校では1963年（41歳）から美術の教諭も兼任している。理科では危険が伴うため緊張感をもって厳しい面持ちで教鞭をとったとのことだが、美術では常にこやかな面持ちで教鞭をとり、楽しくてしょうがなかったと齋藤は語る。他教科の不得手な生徒達が、美術の時間は自主的に生き生きと学習が出来るように、色々な工夫を試みたようだ（なお、定年退職した同年、麻生学園専任の美術講師となっている）。1982年（60歳）から銅版画に着手し、キャベツというモチーフと出会う。キャベツで生命を表し機器で文明を表すという内容をメゾチント技法で制作することについて、「確かな手応えを感じた」と齋藤は振り返っている。銅版画制作は1992年（70歳）で一旦中止している。腱鞘炎で銅版画制作ができなくなったため、木版画やシルクスクリーンを制作した。この時期のキャベツをモチーフとした作品群は、その後生涯続く齋藤の画業の根幹を作り上げた。

### 4. 現在

齋藤は2000年（78歳）、福岡でのアートプロジェクト（宮司・アート参道プロジェクト）にて、棒の頭に生のキャベツを刺したものを50個並べたインスタレーションを発表した。インスタレーション自体には1970年ごろから少なからず取り組んではいたが、キャベツというモチーフを得て、これまでの制作経緯が実を結んだ形といってよい。2008年（86歳）の福岡アジア美術館での個展では、2000年のインスタレーションを彷彿とさせる展開を見せた。ここではキャベツを石膏で型取りしたものが作品の一部に使用されている。

2015年（93歳）に齋藤は家族・友人・知人の肖像と魂を描いた灯籠作品を発表した。これまで描いてきたテーマ「文明の暴走」をさらに展開させて、「魂の供養」に着目した作品である。それこそが文明の暴走を止められる数少ないものだ、と言わんばかりだ。

供養という行為は、「魂」という目には見えないものに対して手を合わせる。人間の行為を数百年前まで遡り、また数百年後の未来まで想いを馳せる。そのような未来への僅かな希望を、「魂」に載せたように見受けられる。また、この灯籠作品には、齋藤作品としては長年のブランクを経て、抽象画も描かれている。クラスメートや家族の肖像画を具象で、その魂を抽象で描き、それをひとつの灯籠という立体物に盛り込むといったスタイルだ。

一方で、2017年（95歳）にはキャベツと機器を組み合わせたモチーフをアクリル画で制作を開始した。齋藤の「魂の供養」で得た前向きな展望を、銅版画の世界に描き加えるような行為に見える。かつて齋藤が「文明の暴走」を描くとき、色は「記号」としての役割に留まっていた（たとえば石膏のキャベツには信号の色が着色された）。これからその「色」が「記号」という役割を飛び出してどのような様相をもつかも、注目されたい。

齋藤は大学時代に現代社会の大きな課題に打ちのめされ、二科会時代からの「美術を介して訴える」姿勢は九州派時代によって勢いを高めた。齋藤にとって、九州派に参加したことは、ある意味では抽象画を強いられる不本意な状況だったのかもしれない。しかしそれによって齋藤が、それまでの具象表現だけでなく、抽象表現、インスタレーション（立体作品を含む）と、表現の幅を広げたことは否めない。

齋藤の現状に満足しない野心と自身を俯瞰する客観性は、表現の殻を破る原動力となった。その力は、格式的な具象画を描いていた齋藤に躍動的な抽象画を描かせた。さらに、抽象画を描いていた齋藤を解放させ革新的な具象画にのめり込ませた。

齋藤は、「生涯、物申す絵描きでありたい」と言うが、それを貫くために今自分に無いものを、あるいは自分の持てるものを、問い続ける姿勢が備わった。

今回の展覧会は、宮崎県西都市に生まれた美術家が、宮崎県内にて未だ取り上げられていない現状をきっかけに、齋藤の制作の経過を改めて整理し紹介することを目的として開催された。主要な作品群は紹介できたものの、その背景にある二科会時代や九州派時代の作品は展示しておらず、齋藤作品の芸術観を知る為に充分であったとは言い切れない。しかし、まずは九州派の美術家が宮崎出身者の中にもいたということを知らしめたい。そして、宮崎ゆかりの芸術家のなかでも、まさに社会派と呼ぶべき作品を制作する齋藤秀三郎の功績が今後一層認知され、評価されていくことを願いたい。



齋藤 秀三郎 年譜

- 1922 宮崎県西都市に生まれる
- 1935 宮崎県三股村長田尋常小学校卒業  
父の仕事（営林署）の関係で小学校卒業まで山村で育つ。小学校4年の頃からクラス担任の影響もあり、絵に熱中する。
- 1942 県立第一鹿児島中学校（現 鶴丸高等学校）卒業  
※県立第一鹿児島中学校で安田尚義（高鍋町名誉町民）に学ぶ  
中学校では、図画の時間が楽しみだった。
- 1943 南満州工業専門学校鉱山工学科（大連）入学
- 1944 同校2学年の時、第二期海軍飛行専修予備生徒を志願し、三重海軍航空隊に入隊



海軍飛行予備生徒

- 1945 終戦 西都市へ帰省  
帰省の途中、見渡す限り、焼け野原と化した広島の惨状を目にする。
- 1946 （旧制）第七高等学校・理科に入学
- 1950 妹 篤子 没（享年 17 歳）  
妹の死亡の悲しみは余りに深く、今に至るまで癒えることはない。
- 1952 （旧制）九州大学農学部水産学科卒業  
福岡市立姪浜中学校（理科）に就職  
大学では水産資源学教室。濫獲により資源は容易に無くなることを知る。  
大学卒業時、示された就職先が寒いところだったので、寒さが苦手な私は市内の中学校に就職。そこで新進気鋭の美術教師との出会いがあり、猛烈に美術に目覚める。
- 1953 伊藤研介（二科会会員）に師事  
第9回福岡県美術展（岩田屋ホール／福岡）  
伊藤研之先生（二科会会員）に師事する。

その頃のモチーフは子どもや労働者だった。

1954 第10回福岡県美術展（岩田屋ホール／福岡）

1955 第40回二紀展初入選（東京）



二科展出品の頃

1956 第41回二科展（東京）

1957 第13回福岡県美術展（岩田屋ホール／福岡）

第42回二科展に落選

「九州派」に参加

二科展落選の衝撃は大きかった。九州派のリーダー桜井孝身氏に会い、決意の程を話して九州派に入れてもらう。桜井氏曰く「俺たちは落選者を大切に作るグループなのだ」と、感動する。



九州派時代

1958 第14回福岡県美術展（岩田屋ホール／福岡）

第13回熊日総合美術展（熊本）

九州派街頭展（福岡県庁壁面）

第10回読売アンデパンダン展（東京美術館）

第1回九州アンデパンダン展（西日本新聞社講堂／福岡）

県展の審査制に反対して、九州派主催の「九州アンデパンダン展」を開催。

グループは革新の意気に燃えていた。

1959 第9回モダンアート展（東京）

第23回自由美術展（東京）

第2回九州アンデパンダン展（西日本新聞社講堂／福岡）

第3回九州派展（銀座画廊／東京）

九州派時代は掲載の写真以外は○や□をギッシリ並べた、いわゆる「集合空間」を描いていた。恐らく群衆という意識が底にあったのだろう。

第15回福岡県美術展（岩田屋ホール／福岡）

福岡県立盲学校に転勤

この時期、特殊教育に興味を覚える。

「グループ西日本」に参加

「グループ西日本」にて弥勒祐徳（画家・西都市在住）と出会う



グループ西日本の頃

1960 第1回グループ西日本・結成展（福岡丸善画廊／福岡）

グループ西日本・結成展（銀座画廊／東京）

尾方利男・齋藤秀三郎／二人展（銀座画廊／東京）

第2回グループ西日本展（福岡丸善画廊／福岡）

組合活動に熱心で、率先して大牟田労働争議にも泊まり込みで参加する。

九州派の運動がひとしきり続いた後、グループは休息状態に入り、この先を案じていた時期があった。その頃、会員の一人磨墨静量氏から別にグループを造らないかという相談を受けた。私は少なからず驚いた。私は組合活動にも熱心な桜井氏と考え方が近く、何等不満などなかったからである。しかし、今までのコンセプトが果たして抽象画で表現できるのか、かと言ってみんなが抽象へと進む中で、ひとり自分だけが具象を通す意志も弱く、悩んでいたのも、この機会に抽象を学ぶべく「グループ西日本」に参加することにした。

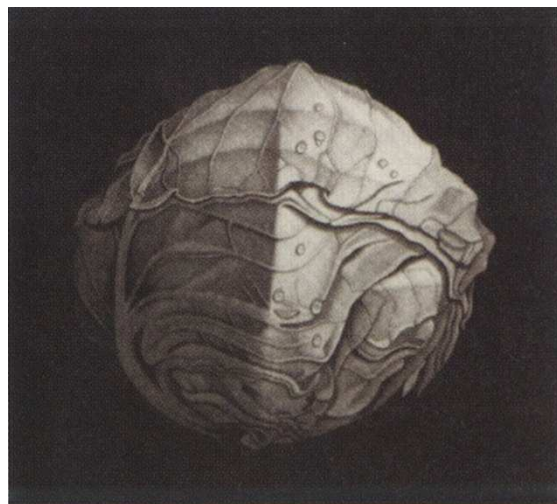
1961 第3回グループ西日本（丸善画廊／福岡）

- 1962 第4回グループ西日本展／小品展（福岡天神ビル／福岡）  
第5回西日本美術協会展＊グループ西日本改称（新天会館／福岡）
- 1963 福岡市立福岡商業高校（定時制）に転勤
- 1965 第3回朝日賞油絵コンクール展（北九州市立八幡美術館／福岡）  
集団21結成  
集団21第1回展（福岡県文化会館／福岡）
- 1967 第1回福岡市民芸術祭／市長賞（福岡）  
集団21第2回展（博多井筒屋／福岡）  
個展（福岡フォルム画廊／福岡）  
当時の美術界はアンフォルメル旋風の時代、サム・フランシスやジャン・デュビュッフェ等を研究した。
- 1968 第2回福岡市民芸術祭／奨励賞（福岡）  
「九州文学」8月号の表紙



TNC テレビ西日本

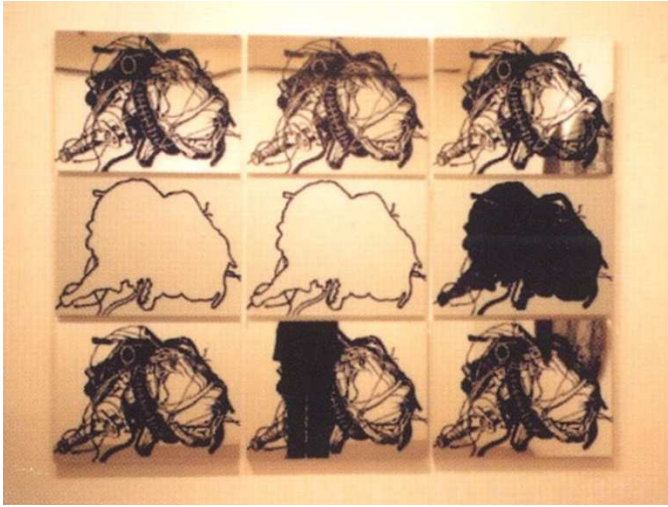
- 1969 第3回九州・現代美術の動向展（福岡県文化会館／福岡）
- 1970 第4回九州・現代美術の動向展（福岡県文化会館／福岡）  
この時期、初めてインスタレーションを試みる。
- 1972 福岡市民芸術祭招待出品
- 1977 今日の美術展
- 1981 個展（小倉井筒屋／福岡）
- 1983 福岡市立福岡商業高校退職  
麻生学園・美術講師
- 1985 第1回和歌山版画ビエンナーレ展（和歌山）  
この頃、版画と出会う。メゾチント技法による銅版画を始め、表現の確かな手応えを感じる。



第1回和歌山版画ビエンナーレ展出品

- 1987 第18回現代日本美術展（東京）  
第3回西武美術館大賞展（東京）
- 1988 九州派展（福岡市美術館企画／福岡）  
第11回グレンヘン国際版画トリエンナーレ展（ハルデンシュール／スイス）  
第2回リュブリン国際反戦芸術トリエンナーレ展  
（メダネク国立美術館／ポーランド）  
国内、外のコンクールに銅版画作品を出品し続ける。
- 1989 第18回リュブリアナ国際版画ビエンナーレ展  
（リュブリアナ近代美術館／旧ユーゴスラビア）
- 1991 第13回エンバ美術コンクール（エンバ中国近代美術館／兵庫）
- 1992 個展（福岡市美術館／福岡）  
第14回エンバ美術コンクール展（エンバ中国近代美術館／兵庫）  
個展（シロタ画廊／東京）
- 1993 第15回エンバ美術コンクール展（エンバ中国近代美術館／兵庫）  
1993年から1999年の間、腱鞘炎のため、銅版画制作が出来なくなったので、木版画やシルクスクリーンの作品を制作。
- 1994 齋藤秀三郎版画展（久我記念美術館／福岡）  
第16回エンバ美術コンクール展（エンバ中国近代美術館／兵庫）  
妻 麻子 没（享年 65歳）
- 1997 個展（ギャラリーとわーる／福岡）





1997 ギャラリーとわーる（福岡）

1999 個展（ギャラリーとわーる／福岡）

2000 宮司・アート参道プロジェクト参加（宮地獄神社参道／福岡）

宮司・アート参道プロジェクト（野外展）では、神苑に棒の頭に生のキャベツを刺したものの50個を並べて雨風に曝し、腐敗してゆくのを観るインスタレーション。

個展（ギャラリーとわーる／福岡）

2008 個展（福岡アジア美術館）

2009 個展（アートスペース獺／福岡）

村上勝氏の企画展「能古プロジェクト」参加（能古島／福岡）

「能古プロジェクト」も野外展、若い作家たちとともに参加する。

個展（由布院駅アートホール／大分）

由布院駅アートホールでは、コピーして作った石膏のキャベツ、平面画、版画等によるインスタレーション。



2009 由布院駅アートホール（大分）

「能古プロジェクト・ドキュメント」展（アートスペース獺／福岡）

2011 個展（アートスペース獺／福岡）

2012 第7回津屋崎現代美術展（福津市／福岡）

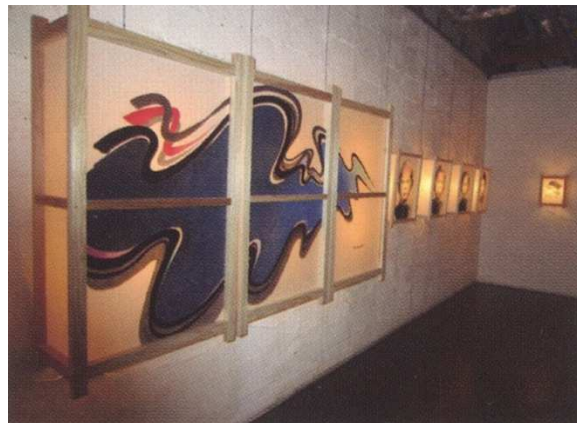
個展（アーツスペース貌／福岡）

2014 個展（アーツスペース貌／福岡）

2015 2人展「みじかなるもの・はるかなるもの」

黒岩俊哉／映像作家＋齋藤秀三郎／美術家（ギャラリーおいし／福岡）

次々に亡くなった家族・友人・知人の肖像と魂を描いた灯籠に、花を描いた絵を加えて  
インスタレーションを制作。



2015 ギャラリーおいし（福岡）

2017 齋藤秀三郎展・キャベツ 現代文明に対する不安（ラスチカス／東京）

「札幌国際芸術祭2017」・DOMMUNE SAPPORO 参加

個展（アーツスペース貌／福岡）

注：それぞれの出来事の下に記載されている文（灰色・ゴシック体）は齋藤秀三郎自身が  
それらの出来事について触れた文章である。

（齋藤秀三郎銅版画集 2017年7月30日刊行

刊行者 齋藤秀三郎 発行所 行光出版 印刷 博巧印刷 製本 渋谷製本 ）より

[写真提供]

齋藤秀三郎 (cat.no.6-17)

「96歳の現代美術家・齋藤秀三郎 文明キャベツ」

展覧会会期：2018年10月27日（土）～11月25日（日）

主 催：高鍋町美術館・高鍋町教育委員会・高鍋町

後 援：宮崎日日新聞社・MRT 宮崎放送・UMK テレビ宮崎  
エフエム宮崎

<データアーカイブ>

制 作：高鍋町美術館